

和歌山県立博物館特別展開催 !!

和歌山県立博物館で、10月15日(土)から11月23日(水・祝)まで特別展「濱口梧陵と廣八幡宮―法蔵寺・養源寺・安楽寺の文化財とともに―」が開催されます。

開催要項には、『安政地震津波の際、濱口梧陵(1820~85)は被災した村民救助にあたり、道端の稲むらに火を放ち、暗闇に戸惑う村民を避難先である廣八幡宮まで導いたといわれています。この梧陵の事蹟は、「稲むらの火」として、今なお語り継がれています。

梧陵が生まれ育った広村(広川町)周辺は、山側を熊野古道が通り、海側は港町として古くから栄えました。その繁栄を示すように、広村周辺にはたく



さんの寺社が建立されています。まず、東広荘の総鎮守社廣八幡宮と別当寺明王院を挙げることができます。このほか、永享年間に明秀が開山し、江戸時代初めに一空が中興した法蔵寺(浄土宗西山派)、徳川吉宗の母浄円院が帰依し、宝永地震津波直後に入寺した日寛によって復興された養源寺(日蓮宗)、梧陵を輩出した濱口家の菩提寺でもあった安楽寺(浄土真宗)なども挙げられます。

この特別展では、濱口梧陵の事蹟を紹介するとともに、広村周辺に所在し、宝永・安政・昭和南海と幾度の地震津波に遭遇しながら、人々の努力で今日まで守り続けられてきた廣八幡宮・明王院をはじめ、法蔵寺・養源寺・安楽寺の文化財を紹介します。』と書かれています。

今回の特別展に出展される文化財には、廣八幡宮が所蔵している重要文化財の短刀などがあり

ます。また、かつて明王院が所蔵していた仏像のなかには、現在大阪の四天王寺所蔵となっているものがあり、そのなかで大日如来坐像が展示されます。明王院の本尊の十一面観音立像も展示されます。八幡宮では、本殿や楼門などの多くの建築物が文化財に指定されていますが、建築物以外の多くの文化財が展示されるということです。

法蔵寺は、西山浄土宗の中心的な寺院ですが、和歌山県内で広めた明秀上人像や十六羅漢像等が約20点出展されます。また、養源寺開祖からはじまり、八代将軍徳川吉宗の母である浄円院ゆかりの文書等が展示されます。日蓮宗に関することばかりではない、興味深いものです。安楽寺は住職の書や住職と知り合いだった文人が残した書画がたくさん残されていて、約20点が出展されます。稲むらの火の館に展示している濱口家所蔵の津波6年後の広村復興の絵図を描いた山陰の画家黄仲祥の絵も数点展示されます。

濱口梧陵に関するものでは、津波に関する物はもちろんですが、耐久社に関する物。濱口家から和歌山県立図書館へ寄贈された「梧陵文庫」の書籍の数々、稲むらの火の館所蔵の「濱口梧陵とナイヤガラ瀑布」の油絵、勝海舟お手製の楽茶碗等も出展します。

広川町の文化遺産、そして歴史を知る上での貴重な展覧会になると思います。そして、このような展覧会は度々開かれるものではないので、この機会に観覧されることをおすすめします。

.....

「稲むらの火講座」は満席です

10月9日に予定しています「第18回稲むらの火講座」は、60名の定員で募集していましたが、9月中旬に満席となりました

「やかただより10月号」では皆様に伝わらないかもしれませんが、当日来られても入場していただけないと思います。県立文書館との共催で、「県民の友」でも広報された為、県下各地からお申し込みがあったからだと思います、御了承下さい。

百世安堵

関西大学社会安全学部 近藤誠司

第19回 カサンドラのジレンマ

カサンドラとは、ギリシア神話にも登場する、トロイ王朝最後の王女のこと。太陽神アポロンの怒りをかい、「誰にも予言を信じてもらえない」という呪いをかけられてしまった。

南海トラフ巨大地震などの低頻度・低確率の巨大災害のリスクを世に問うことは、このカサンドラの苦悩を引き受けることでもある。仮に、「誰にも信じてもらえない」ままに月日が流れ、国難級の地震・津波が襲来してしまえば、われわれは立ち直ることもできないくらい深刻なダメージを受けることになるだろう。最悪の事態である。

ところで、仮に、「みんなが改心して対策を進めるようになる」とすれば、どのような結末を迎えるだろうか。被害を最小限に食い止めることができたあかつきには、「大げさな予言(被害想定)を言い募っていた輩は、人騒がせな大嘘つきだった」という誹りを受ける危険性がある。

カサンドラの未来は、事の帰結がどのようになったとしても決して幸福にはなれないように運命づけられてしまっている。カサンドラのジレンマとは、独力では抜け出すことができないほどに、強固で根深いものなのだ。

しかし…。脱出路はあるはずだ。先に「独力では」抜け出せないと書いた。したがって、この点を替えればよい。「みんなで」意識づけをしたうえで、最悪な想定(予言)を覆すようにアクションするのだ。予言がハッピーな方向で外れたら、「みんなで」力を合わせた結果を、「みんなで」言祝ぐのだ。もちろん、カサンドラも一緒に。

では、「みんなで」取り組んでも、結末が思わしくなかったらどうするのか。そのときは「みんなで」力及ばずの事態を嘆くことになるだろうが、その後、「みんなで」復興と防災・減災に向き合うことにもなるであろう。次こそ、カサンドラの予言を幸福の梃子にするために。

【館長日記】

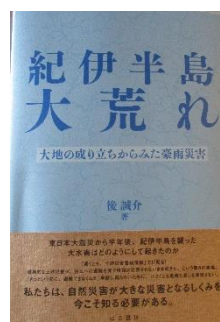
新型コロナが蔓延して2年半余り、館長は久しぶりに対面での講演を依頼されました。9月上旬に、西宮市の武庫川女子大学健康・スポーツ科学科の専門科目として「災害に備える」というテーマで依頼されました。いつもの通り、稲むらの火と濱口梧陵翁の津波防災の話ですが、1時間という少し余裕がありましたので、教育振興や医学への貢献の話題も付け加えました。医学への貢献では、関寛斎の話もしました。講演が終わった後、副担当の先生が、始まる前にご挨拶した時には、今年千葉県からこちらへ来ました。と言われていたのですが、関寛斎の名前が出たので、順天堂大学から来たのです。関寛斎との関係があるので、順天堂、佐倉順天堂と関係がありますね、と声をかけていただきました。梧陵さんは幅広く活躍をされているので、いろいろのところで話題になるのだと、改めて感じました。

もう一つ、別の話です。湯浅小学校の4年生が見学に来てくれました。館長のガイダンスの後、一人の女の子が先生と質問に来てくれました。

「稲むらの火の話を作った人は誰ですか。」ということでした。ガイダンスの中で原作は小泉八雲ということは話していました。でも、「稲むらの火」の作者の名前までは話していませんでした。湯浅町山田生まれの中井先生は、もと三ツ橋さんですと答えました。今居てる三ツ橋さんはおじいちゃんのことです、と教えてくれました。おじいちゃんから、きっちり話が伝わっていたのでしよう。それを確認したかったようです。

それを聞いて私も、うれしくなりました。

「紀伊半島大荒れ」いただきました



和歌山大学災害科学・レジリエンス共創センター客員教授の後誠介先生がこのほど出版されました。「稲むらの火の館」へも1冊ご恵贈いただきました。後教授は、以前「ワダイの防災カエ」で、講演してくれました。館内閲覧コーナーへ置いてあります。興味のある方はご覧ください。